

第1章 2. ギリシア世界 d. アテネ民主政とペルシア戦争

アテネの民主政の特徴=市民は貧富にかかわらず平等な参政権を持ち、[1 直接民主]制をとる

→[2 奴隷]や在留外人、[3 女性]には参政権がない

国家の政策…成年男子[4 市民]の全体集会である[5 民会]で決定

行政…一般市民からの[6 抽選]で任期一年の役人が担当(ただし[7 将軍]などはのもぞく)

裁判…抽選された多数の[8 裁判官]が民衆裁判所の投票で決定

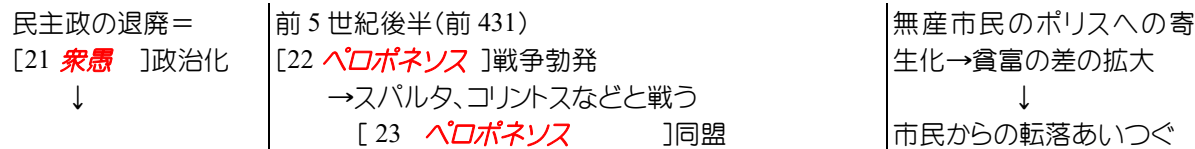
役人・政治家の責任→[9 弾劾裁判]などで厳しく追及する

※ギリシアの民主政と現在の民主政のちがい

- 1)[10 奴隷]制が基礎=「市民」のみの民主主義。 2) 参政権は[11 成人男子市民]に限られる。
- 3) 代議制でなく[12 直接民主制]をとる 4) 政党がなかった。

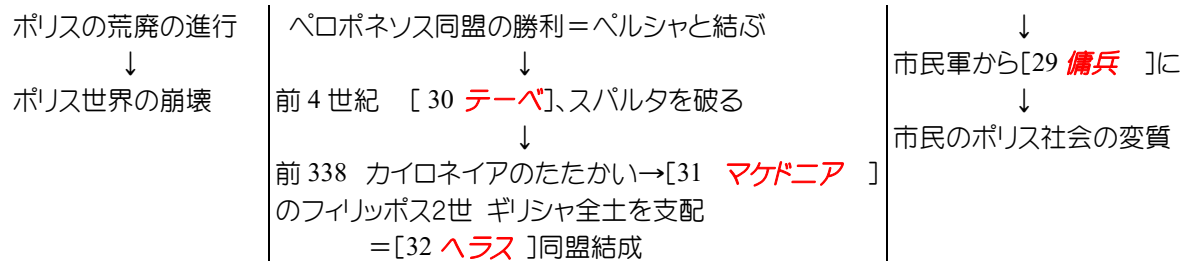
f. ポリスの変質

前5世紀後半アテネが[13 スパルタ]、コリントスなどペロポネソス同盟と戦った[14 ペロポネソス]戦争が勃発すると、アテネでは[15 デマコーク(扇動政治家)]のもとで民主政の退廃がすすむ[16 衆愚]政治化がすすみ敗れた。しかし勝利したスパルタも前4世紀テーベにやぶれ、つづいて北方の[17 マケドニア]のフィリッポス2世が前338年[18 カイロネイア]の戦いで[19 アテネ]とテーベの連合軍を破りギリシア世界の覇権を獲得、[20 ヘラス(コリント)]同盟を結成、多くのポリスを支配下においた。



ペロポネソス戦争…前5世紀後半、ギリシアで起こった戦争。デロス同盟の盟主として力を伸ばしてきた[24 アテネ]に対抗して、[25 ペロポネソス]同盟を結んだ[26 スパルタ]などが挑んだ戦争。このなかで、ギリシアは[27 ペルシア]の働き掛けもあって混乱した。またアテネは[28 衆愚政治]に陥り、ついにスパルタに屈服した。

衆愚政治…ペリクレス時代終了のアテネの政治が、扇動政治家の指導のもとで目先の利害にとらわれていった政治をいう。民主政治の墮落形態とされる。

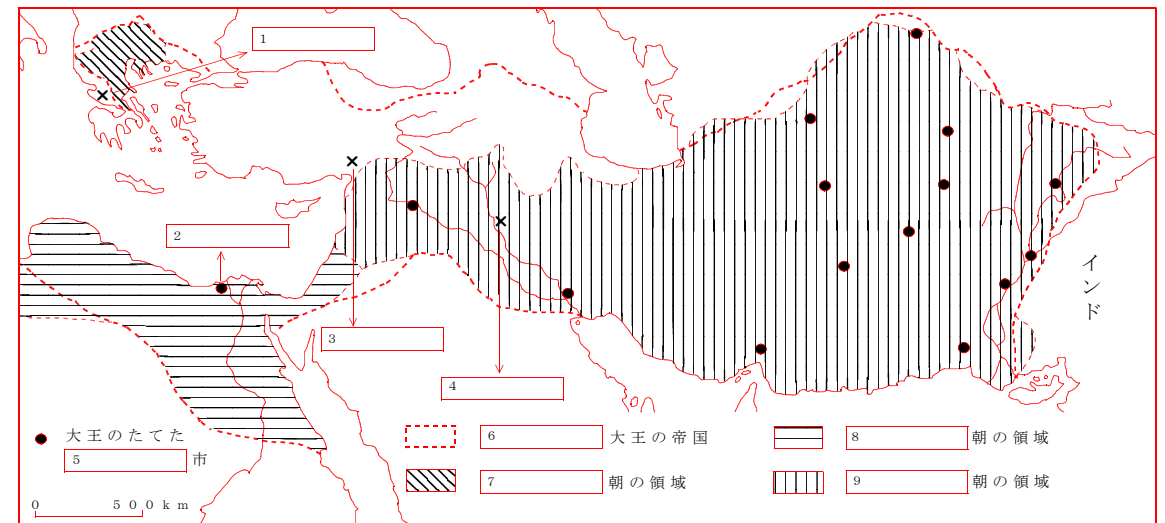


f. ヘレニズム時代

前4世紀中期、[33 カイロネイア]の戦いでアテネ、テーベの連合軍を破りギリシアの覇権をにぎったマケドニアの[34 フィリッポス二世]はペルシア遠征をめざしたが暗殺され、その遺志は彼の子である[35 アレクサンドロス]王に託された。

彼は父の遺志をつぎ東方遠征へ出発、[36 ペルシア]を滅ぼし、わずか10年でインダス川～エジプト～ギリシアにひろがる大帝國を樹立した。(前334～324)。遠征の途上、彼は各地に植民市(=[37 アレクサンドリア]と名付けられる)を建て、ギリシア人を移住させた。巨大な帝國を建設すると彼は自分が支配する地域の 38 東西融合をはかるとともにペルシアの儀礼のとり入れなどもおこなったが、前323年、彼は急死した。こうしたなかで、ギリシアの文化は東方の文化との融合が進み、新しい文化が生まれた。これを[39 ヘレニズム]文化と呼ぶ。

後継者(ディアドコイ)の争いのなかで、彼の帝國は3つに分裂した。しかし、これ以後も、ギリシア文化はこうした地域で発展した。こうしたギリシアの影響を受けた地域を[40 ヘレニズム]世界と呼ぶ。とくにプトレマイオス朝の首都[41 アレクサンドリア]は[42 ヘレニズム]世界の中心としてさかえた。これらの国の多くは前1世紀までに[43 ローマ]に滅ぼされていく。



アレクサンドロスの帝國とヘレニズム時代の3王国

- ①前336、フィリッポス2世の子、[44 アレクサンドロス]王の即位、前334 東方遠征へ出発(～324)  
↓
- ②[45 アケメネス朝ペルシア]帝國を滅ぼし大帝國を樹立(インダス川～エジプト～ギリシア)  
→各地に植民市(=[46 アレクサンドリア])を建てる
- ③ [47 民族融和]政策=[48 通婚]政策・ペルシア風の儀礼の取り入れ
- ④前323 アレクサンドロス死亡→帝國の崩壊、後継者(ディアドコイ)の争いで3國に分裂  
  - アンティゴノス朝マケドニア
  - [49 セレウコス朝シリア]
  - [50 プトレマイオス]朝エジプト→ヘレニズム文化の中心
  - 首都[51 アレクサンドリア]の繁栄=通商、文化の中心
  - いずれの國も前1世紀までに[52 ローマ]に滅ぼされる。
- ⑤アレクサンドロス東征から前1世紀=[53 ヘレニズム]時代という。